

供会活動に参加。この間、林屋健三「京都」に従って洛内外の旧蹟を意欲的に探訪しまわる。

昭和四十三年一月、部落研Ⅱ民青に煩悶、同時に意志の弱さを反省、一カ月間家に毎日手紙を書くことを決意しこれを遂行。同年四月、部落研を退部。学友牧野氏の嵐山の原田方に下宿を移す。同年五月、ワンダーフォーゲル部に入部、以来十二月まで十数回のワンゲル行事に参加し、男子に伍して山登りにファイトをもやす。

同年十二月、学園新聞社問題をめぐって学内ゲバ発生、自らの手で立命を守るべく問題点を探求し「現代の眼」「朝日ジャーナル」等をむさぼり読む。昭和四十四年一月、学寮問題が紛糾して大学本部「中川会館」が封鎖され、さらに学園紛争がエスカレートするに及んで自ら行動すべくバリケードに入る。同年三月、下宿の友人の紹介で京都国際観光ホテルにウエイトレスとして働く。そしてこれまでの、家庭的な下宿を離れ友人と別れて、孤独に身をおくべく下宿を丸太町御前通りの川越宅に移す。

昭和四十四年六月二十四日未明、自殺。

(高野三郎編)

失格者の弁

高野三郎

忘れもしません昭和四十四年六月二十五日、いつもの通り出勤して間もなく、何気なく受けた電話だったが、「こちら警察です。京都西陣署からの連絡ですが、おたくの悦子さんが自殺しました……」まさに青天の霹靂でした。

取るものも取りあえず京都に飛び本人であることを確認したとき、「どうか誤報であってほしい」とのはかない一縷の望みも、もろくも崩れ去ってしまいました。翌日、赤旗なびき騒然たる京大医学部に安置された遺体を引取り、午後四時から洛西の衣笠山葬場にて家族と在京の友人たち十数人で涙ながら最後のお別れをしました。すっかり灰となったまだ温かい骨箱を胸にだきしめたとき、あの娘は本当に死んでしまったのだという実感がヒシヒシとわき、これでやっと親の手許に帰ってくれたのだ、それにしても何と変り果てた姿だろうと、あふれる涙はどうすることもできませんでした。

二十六日は下宿で遺品を整理しましたが遺書はみつかりませんでした。でも、十数冊の大学ノートに書き綴られた日記がありました。それは一九六三年一月一日(中学二年)から始まって死の前々日六九年六月二十二日までの心の記録です。最終のノートには「カルチエ」と題してあり

ました。涙でかすむ目を拭いながら一気に読み通して愕然となりました。

私が、親の私が抱いていた「悦子」と別の人間がそこにいたのです。我が子のことは、生れたときからすべて知りつくしていると思っていたのに……、私とあの娘の間にはこれ程の断絶があったとは。親と子の断絶、それはあの娘が親の手を自ら拒否してしまったのかもしれない。でも、それにも気付かず呑気にこれ迄の「カッコ」として接していた私、スクスク、ノビノビと育てほしいと思うあまり、自由にと思っているうちに、大きな岐れ路に気付かず親と子は左右に分れて進んでいたのです。そしてそれに気付いた時には幽明境をわかち、も早手をさしのべても届かぬ彼方に逝ってしまっていたのです。まことにお恥ずかしい次第ですが、親として落第であり失格です。五月三十一日、東京にまで呼びよせて話しあったとき、私は、学園問題に関連してあの娘が学生生活を続けるべきかどうかという観点から論理を展開しました。ところがあの娘は「今日、東京へ行く。……家族との訣別をつけるために。(五・三〇)」と書いていたのです。

親に先立つ子の不孝という言葉がありますが、子に先立たれた親の不幸は悲惨なものです。それにも増して親と子の心の紐が断たれたまま永遠に繋がることのないという心の空虚さは、これから私の一生、心の傷として背負っていかねばならないのでしょうか。

故人の手記を発表してほしいという話があったとき私は迷いました。手記が、発表されることを予期して書き綴られたものでないだけに、故人の恥部をさらけ出すことを恐れたのです。故人のプライベートを尊重してソットしておくべきだとの御意見もありました。にもかかわらず、あえてそれを乗りこえさせたものは、編集者のたつての懇請もさることながら、平凡な家庭に育ち平凡なコースを歩んだはずの一人の娘が、非凡な終末をとげるに至ったのは何故なのか、そして

親として平凡なコースに戻らせるべくアドバイス(コントロール?)はできなかつたものか。この辺の経緯と親と子の断絶、これらを汲取っていただいて他山の石としていただけたら、という次第なのです。

今思えば、あの娘は生れ星が悪かったのかもしれませんが。昭和二十四年一月二日、私共の次女として生を享けました。ベビブームでこの層の若者たちは万事につけ激烈な生存競争の宿命を負っていました。それに十七カ月先に生れた姉は初孫として祖父母の溺愛をうけ、下は長男でこれは我が家の後継者として愛されました。親として三人の子に区別はありませんが、あの娘には父親の私がカバーしてやることを特に意識したものです。女が二人続けば着物も「おさがり」と相場がきまり幼な心にも寂しい思いをいだいたことでしょう。姉とは小、中、高校と同じコースを辿りましたが、姉妹というよりもむしろ競争相手として反発する面もあつたようです。それでも姉を尊敬し、姉の入試合格などには心からのお祝いをおくっていました……。

そのせいか小学校に入学して環境が開けたとたん、極めて朗らかに活発に行動し時にはチャメをやってクラスの人気者になっていました。「……私、中学三年の女子です。身長一・五〇メートル、体重三八キロ、背は前から六番目でチビについて劣等感を持っています。性格はまあ明るい方ですが、そのくせ人がいない時は寂しくなることもあります。学校にいるときは良い子ですが、家ではすぐにフケれる我がままな子です。……(六三・一一・三)」と自らを評しています。幼児期に心臓弁膜症の疑いがあり過激な運動は控えるようにということで、学校時代には随分と大きなハンディを負わされていました。皮肉なことにスポーツが大好きで、いつも人に先がけ

て暴れ回る方だったのに、親はブレーキをかけていたものです。徐々に鍛えようという事で幼い時に私と子供達は、よくマラソンをやりました。年齢順に折返し地点をずらしてゴールインは同時になるようにしたのですが、心臓のことで折返点を近くすると不満げな顔をしていたのを思い出します。以来、一人でもよくマラソンをやっていました。

「昨日のマラソン、二年女子で一位だった。全然思いもよらなかったことでとても嬉しい。メダルを大切にしまっておこう。(六三・二・三)」と書いています。

宇都宮女子高時代、あの娘からバスケットを取りあげたこともありましたが。一年のときクラブに入り「バスケットをやるようになってからオシャベリになったみたい(六四・七・二三)」といつてとても楽しくやっていました。でも水戸遠征のメンバーから外されたとき「……私は心臓弁膜症だから無理なんです。私にはとてもみんなのように素晴らしく動けないんです。だけどやれるところまでやるんです。……私は油虫のような存在だということをお忘れなように。……先天性心臓弁膜症だなんて、私はなんて不幸な星の下に生れたのでしょうか(七・二三)」と自分のハンデイを意識しながらも「……ルーズボールが辛かった。ちくしょう、ちくしょうと言いながら走った。でも頑張った。……辛さから逃げてはいけない(八・九)」と合宿もやりとおしました。背の高いクラブ員の中でチビが頑張り続けていたのはよほど好きだったのでしょうが、あまりにも疲労が激しいので翌年の二学期には親が出てどうとう止めさせてしまいました。ふびんなことをしたものです。

でも、親の反対にも拘らずあの娘がどうとう最後まで自分の意志を貫いたことが三度あります。第一回は立命館大学への入学です。立教、明治と東京の大学にも合格していましたが、私は

立教大学に入るよう再三再四にわたって説得したのですが、ガンとして「反骨精神、奈良本教授の立命館史学、歴史のみやこ京都、の条件により立命館大学史学科を希望……(六六・九・一六)」の主張を曲げず、どうとう親が折れてしまいました。思えばこれが誤りの第一歩だったのでしょう。でも、あれほど切望していた立命館史学なのに、二年足らずで失望してしまったのは何故なのでしょう。大学問題について云々するつもりはありませんが、改革されるべき何ものかがあるようです。

第二回は授業料の不払いです。六九年四月から再三にわたって大学当局からの督促状、私はあの娘に送金して払い込むよう説得を続けました。でも「……大教室ではマイクを片手にした教師が、彼の学問とやらをパクパクとしゃべっている。五月の頃になると大教室での学生は、あの広い空間にポツンポツンと……坐っている。……その一番前にいる奴は……教師のおしゃべりは、もうアキアキし始めている。おや、あなたの隣りの奴は何か熱心にやっていると思ったら、漫画の本を読んでいる。……どうとうあなたはねむりを始めた、私がしたように。これがあなたの求めていた大学というものだ。大学にとって、あなたという人間——学生とよばれているあなたという人間——が必要なのかと思ってみたことがありますか？……あなたが大学側から受けとったものは、合格通知と入学金支払の為替用紙と、授業料催促の手紙だけだったろう。そしてあなたは……学生証をもらった。そしてあなたは、四カ年の時間をかけて……晴れて卒業することだろう。……大学(側)にとって、あなたはそれだけのことに過ぎないのだ。卒業名簿の中にあるあなたの名前など、大学側にとっては授業料の領収書の意味しかないのだ。ところでその授業料だが、あなたはそれを払うことによって……図書館の本を読み清心館の大教室でねむり

できるという、あなたの生活の免罪符を得ている。だが、もうちょっと考えてほしい。……教室でろうろうとしゃべる教師があなたにとっては何の意味もなさないように、彼らのやっている学問とは生きていく人間……靴みがきをしているおじさん、……道路を掃除しているおばさんたちにとつて何の意味もなしていないものなのだ。かえって彼らを圧迫しているものだというのを考えてみたことがありますか。あなたは、授業料を払って学生証をもらい、講義を受けていることについて何とも思わないのだろうか。(五・一三メモより)」と反発し「学生を商品としかみず、それを管理し、またそれに対する闘いを抹殺しようとしている大学当局へのたたかい……七〇年の安保を控えて大学臨時措置法を制定し機動隊を導入して我々を圧殺しようとする政府への闘い(五・二八)」をつらぬくために、「学生証という薄っぺらな紙きれに己れの存在を託すほど薄っぺらな存在ではない。(五・二四)」と「授業料を払うことによって商品として己れを身売りすることの拒否(五・一九)」を続けたのでした。

第三回は今回の事件で、とうとう己れの意志を貫きとおし取返しのかかぬこととなってしまったのです。自分で自分の思ったとおりにやっただ、六十年の人生を二十年で燃えつくしたのだ、と慰めてくれる方もありますが、親としては何ともやりきれない気持です。

あの娘を知る人は「あんなに朗らかな人が、どうして？ 何故？」と驚きの眼で尋ねます。でも私にも答えようがないのです。当日はいつもの通りアルバイトに出かけています。下宿に戻ってから夜中の午前二時頃「チョット外出します」と声をかけて出たといっています。「真夜中の汽笛の音は一体どんな響きをもっているのでしょうか」と手記にもあるように、星空を眺め孤独に耐

えかねてフト死神にとりつかれたのでしょうか。私にもわかりません。

ある人は「手記を書くことに真面目すぎたのだ」といいます。あの娘も「私はこのノートに向うとき活気づく。勉強の意欲がわく(二・二二)」と言っているように「このノートこそ唯一の私である(六・二〇)」と赤裸々に真実を書き綴り純粋な自己を追求したようです。しかし人間は誰しも世間に対しては大なり小なりの演技を行なっています。「人生は演技だ(三・二七)。生きるということは妥協の連続なのか(六・九)」と思いつつも、このノートに向うとき自己の演技、妥協にウソを見出し「私は非常にうそつきであり(四・二四)今や何ものも信じない。己れ自身も(六・二二)」信じない心境にたち至り、ここで絶望し敗北してしまったのではなからうかと。そうかもしれません。でもわかりません。

またこうも言います。「悦子さんは、とうに死んでいたのだ。肉身が滅びたのが偶々六月二十四日なのだ」と。なる程、「権力に対する防衛として『田川治子』という名を使うことを、ここに決定する(五・五)」として「高野悦子」をこの世から抹殺し、さらに六月に入っては学習活動にもぶり、闘争へのファイトも失い、喫茶店で音楽に耽り、旅にあこがれ「雲にのりたい。雲にのって遠くのしらない街にゆきたい。名も知らぬどこか遠くの小さな街に。……(六・一八)」と逃避を歌っています。そしてすべてのエネルギーを燃やしつくし「……目をつぶると、暗やみに小さな体を恥ずかしげに独りで立っている愛しい女の子の姿が浮ぶ。限りなく愛しい一人の女だ。さびしがりやで甘えん坊の愛しい姿よ。私はおまえを、おまえ一人をこの世で愛す(六・一九)。だっ広い空間にポツンと独りでいる姿を思いうかべている。とにかく今は空っぽなのである(六・二二)」として遺書もなしに終止符をうったのかもしれない。

闘争の挫折感、これが決定的なものだったという人もあります。ぶつかってもぶつかっても巨大な体制という壁はビクともせず次第次第に後退を余儀なくされてしまう。そしてスクラムを組みながらも頭をかすめる違和感、同じ学生でありながらやれ全共闘やれ民青となぜセクトを争わねばならぬのかという疑問……ここに挫折、敗北があったのだということでしょうか。

失恋の痛手、特に闘争の挫折で精神的にまいっている時だけに、ヘナヘナと崩れさってしまっただの、という人もいます。

たしかにあの娘は男性コンプレックスをもち「恋人が欲しいと思う 彼は山や海が好きで 気がむくとザックをかついでヒョット出かける そして彼は詩が好き 臆病なくせに大胆で 繊細で横暴…… そして彼は革命を夢みるロマンチスト 行動力 戦闘性は抜群…… (三・八)」と常々 someone を求めていました。そして「ベルノーのような人。まじめ、誠実、やさしさあふれる愛情のある人 (三・一六)」として渡辺に期待してみたものの、「渡辺にあてた……葉書は、おとといの夜灰皿でもやした。それは全ての期待をかけて勝手に造りあげた (寂しさをいやすための) (三・一五)」虚像であったようです。更にアルバイト先の「主任の鈴木があまりに私と似ているのに驚いた。……歩いて行ったあの後ろ姿が何とわびしかったことか。機知とウィットに富んだやさしさと細やかさ溢れる鈴木は、孤独であることを知っているのではないだろうか (三・二九)。寂しがりやで可愛い鈴木少年よ。あなたが愛しい (三・三〇)」と慕うのですが、ホテルのスト騒ぎの結果、「鈴木? 仕事をやるだけの機械人間め! 彼とて現代の独占資本主義の中であえていっている人間だったのだ。これで一つ彼への幻想がうち破られ (四・二五)」てしまうのです。次に中村が登場します。中村には恋人がいるので「恋愛の幻想からの訣別 (五・四)」を思いなが

らも「……ますます 彼と一緒にいたくなる私……男はどこにでも ころがっているのに 何故彼にだけ愛の幻想を試みようとするのか…… (五・一二)」と自嘲しながらも、体制との闘いや「学問の私的所有」の状況を話して共鳴を得ようとするのです。でも最後には「みごとに失恋——? アッハッハッハッ…… (六・一九)」と自嘲の思いやる方なく、「一切の人間はもういらない……すべてをやつを忘却せよ どんな人間にも 私の深部に立入らせてはならない…… (六・一九)」として全ての虚像を抹殺し、「サビシイデスネ (六・一九)」と本音をはき、孤独の淋しさに堪えかねて「生」への期待を失ってしまったのでしょうか。それらの何れもがあたっているのでしょうか、私は私なりにそれらを総括して経過を辿ってみましょう。これが独断かどうか、皆さんの御批判に委ねます。

正月休みに家族と団欒だんらんを楽しんだあの娘が、僅か数カ月で家族と訣別し「十五万円の預金通帳はあてにするな。(それだけの決意があったら燃やしてしまえ) (四・一八)。西那須野の家では連休を伊豆で過ごすという。私も誘われたが今ではあまりに遠い世界となってしまうた高野家のホーム (四・二九)」と変ってしまったのは意外ですが、その因って来る所は学園闘争にあったと思います。正月早々、まだ休みが終らないのに後期試験の準備のため早めに上洛したあの娘を待つていたものは東大を頂点とする大学紛争でした。そして立命大でも一月十七日全共闘によって中川会館が封鎖されました。騒然たる大学をみて、あの娘なりに、これまで既定のものとして受けとめていた立命大に目を向けクラス討論などに参加しますが、本質をぬきにした派閥争いにはついていけないのです。「君は代々木系か反代々木系か」という問いを不信な敵意に満ちたまなざし

で投げかけられる。しかも一年間、同じ机で学んだクラスの友達から。……私は寂しく悲しくなる。……もうこうなつては傍観者ではいられない。……何かを行動することだ。その何かとはなんなのだろう。(二・一)と自問自答しながらも、大学の矛盾、体制への闘いが湧き起り、反逆のしるしとして眼鏡をかけ「父と母の面前で煙草を吸って、両親と対決する(二・七)」ことを決意します。それでも二月にフト思いついて帰省して「家に帰ってきてよかった。……ここには矢張り憩いがある(二・一一)」と述懐しています。

闘争を、初めて行動に表わしたのは、二月十三日でした。上洛した足で何気なく立命大に立ちより、そのまま坐りこみの徹夜をすることになりますが、民青とか全共闘とかのセクトの問題ではなく立命大の崩壊を前に何かをせねばならぬという単にそれだけの気持からでした。二月二十日、始めて機動隊が導入されました。前日から徹夜でキャンパスに坐りこんでいたあの娘は、国家権力、社会、マスプロ大学……その他もろもろの既成の体制に対する怒りをこめて始めて、「機動隊帰れ！」と叫びました。「後ろでノホホンと叫んでいるわけにはいかない。私は先頭へ出て力一杯に……私を取巻く常識や風潮や政府の欺瞞性を『帰れ！』の一語にこめて叫んだ。……敵は強大である……圧殺されてしまったことが口惜しくしてみじめであった。また私は極く自然な気持で機動隊に投石しようという気になった(二・二〇)」と、かくしてあの娘は全共闘と行動を共にすることになるわけです。でも下宿でノートに向えば迷いが生じ疑問が頭をもたげてる。その迷いを振りきるように、行動だけは、機動隊に投石し試験をボイコットし授業料の不払いへとエスカレートしていきます。「私はいきり立つと性急になりすぎる……馬車馬のように後先もみず一目散に突進する(四・一七)」と反省しながらも、反体制断絶へと加速度的に坂道を急

転し始めます。

しかし、これまで二十年の歳月を生活してきた環境から反対側の世界に飛びこんでみたもの、なかなか割り切れるものではなく、そこに違和感が生れ拒絶反応が起って、迷い混沌の渦は大きくなるばかりでした。「論理化せよ、学習せよ」と繰り返すものの「ヒトリデ サビシンダヨ(四・六)。空っぽだなあ。(四・九)」の言葉となり、「ワーッと大声あげて誰かの胸にとびついていけたらどんなにいいことだろう(三・二七)。恋人が欲しい愛がほしい」と告白しています。そして渡辺、鈴木、中村に恋人像を求めますが残念ながら次々とこの像は崩壊してしまいます。一方、自己のブルジョア性をぶっこわすんだ、生活費は親の世話にならぬといって始めたホテルのアルバイトも「仕事は今日もしんどかった(四・一三)」の述懐どおりしよせん無理なことでした。「ちくしょう、やめるもんか！ ここから逃げ出すことは負けることなんだ(四・一三)。やるぞお ぼかあ闘いますぞお(四・一六)」と歯をくいしばって頑張ってみたものの、骨と皮ばかりに痩せ細って目はギョロッキ身心ともに疲れ果ててしまったのです。

いくらやっても世の中に悪と矛盾はなくならない。そこで、「闘ったところで何になる。微弱な風にとおほこりに過ぎぬのではないか。いやあ ぼかあ こんなことでは負けませんぞ。ぼかあ 闘ってますぞ(泣きそうな顔してんじやないの てめえは)(四・二三)」と、フト感じる挫折感を打ち消しながら「どうしてみんな生きているのか不思議です。そんなにみんなは強いのでしょうか。私が弱いだけなのでしょうか。……国家権力というものを知ってしまったということ。ただ、今ではさらに泥深く突き進むだけなのです(四・二九)」と言っているこの時期に、せめて、何でも言える友人、共闘の同志、

恋人、誰でもよい、一人でもいてくれたらとも思います。「今日ネ、バイトが終わったあとで屋上にいってね、星空を眺めながら……。そのとき思ったんだ。どこかに someone がいつでもいるってね。(五・八)」そうです、あの娘は someone を求めていたのです。

遂に「ほとんど静止しているかに見える氷河が、一年前に比べると数メートルも移動し、そしていつかは谷底に向って激しい響きとともに粉々に身を砕く。氷河のようになるかもしれない……(三・二九)」の予言のとおり崩壊の時がきたのです。親として、この氷河の動きを知らず「孤独であり、寂しい」ときに手をさし伸べてやることもできなかったことが痛恨のきわみです。

以上が私なりの総括ですが、つまる所、親の私があの子の死を、生き方を、どうスケッチしようとも身内の主観的な独断的なものでしかあり得ません。読者はそれぞれの立場で、それぞれの感慨をもたれることでしょうし、さらに私の総括からはみ出したものを御汲取りいただければ幸いです。あれから六百日がたちました。この月日の重みはずしりと胸にこたえます。以来、私は毎夜毎夜手記を取出しては、あの娘との対話を続けています。生前につくし得なかった親子の対話です。大学の騒乱は今も跡形もなく(少なくとも外見上は)、全く悪夢のように思われまじ、あの娘もそこまで突きつめずにアト数カ月も保ちこたえてくれたら……と、つい由ない繰り言も出てしまいます。そしてサッサと死んでしまった「カッコ」が口惜しくてたまりません。事件以来、何かと御配慮いただいたクラスメートの皆さんとも、いよいよ卒業でお別れの日が近づきました。でも、私と「カッコ」との対話は、これからもズット続くことでしょう。

最後に、本書は故人の遺志を尊重して、友人諸君のお名前を仮名にさせていただいた他は、原文のまま発表いたしました。御迷惑に存じられる方々もあろうかと思いますが、何卒御寛容の程を御願ひ申し上げます。

なお、故人に対しまして数々の御厚誼をお寄せ下さった皆様、ならびに本書の出版に際しまして御懇篤な御指導と御配慮を賜りました「那須文学」編集部の方内勝次、大平義敬の両氏、新潮社の大門武二氏の三方に対し衷心から御礼申し上げます。

(昭四六・二・一五)